

成長・発達疾患

科目責任者 吉原重美

学年・学期 6学年

I. 前文

小児医学の特徴は、広範な臓器専門領域を含み、小児が成長発達過程にあるために、臓器や系統の障害が他臓器の障害を伴いやすく、全身的な視点に立つ必要があることである。3年生で習得した広範な小児医学の知識を再度整理し、医師となるうえで習得しておくべき重要事項を再確認し、さらに医師国家試験突破に向けての学習の指針となるように、6年生での成長発達の講義を計画し、実施している。

II. 担当教員

教授 吉原重美 (小児科学)
教授 松原知代 (埼玉医療センター小児科)
准教授 鈴木宏 (小児科学)
准教授 今高城治 (小児科学)
准教授 佐藤雄也 (小児科学)
准教授 小山さとみ (小児科学)
講師 福島啓太郎 (小児科学)
講師 坪井龍生 (小児科学)

III. 学修の到達目標

子どもは小さな成人ではない。

つまり、発育期にある子どもは生物学的にも成人とは全く異なる存在であるため、内科とは別に小児科が必要となる。小児科学はヒトの成長・病態・治療・予防を解明して、子どもの心と体の健康と福祉に貢献することを目的とする。

小児科学の目的は、小児の正常発育・発達とその異常によって生じる疾病を理解し、全体の領域について有機的な考え方を修得することである。

- ・0歳から青春期に至る小児の正常な成長・発達を説明できる。
- ・その過程で生じる代表的な疾患と、その原因を述べ、診断・治療について説明できる。
- ・種々の疾患では、その鑑別すべき疾患をあげて診察・検査・治療の要点を述べることができる。

IV. 授業計画及び方法 * ()内はアクティブラーニングの番号と種類

(1:反転授業の要素を含む授業(知識習得の要素を教室外で済ませ、知識確認等の要素を教室で行う授業形態。)

2:ディスカッション, ディベート 3:グループワーク 4:実習, フィールドワーク 5:プレゼンテーション

6:その他)

回数	月	日	曜日	時限	講義テーマ	担当者	アクティブラーニング
1	7	25	月	2	アレルギー疾患, 呼吸器疾患	小児科学 吉原重美	
2		25	月	3	小児救急疾患, 悪性腫瘍	小児科学 佐藤雄也	
3		25	月	4	成長, 内分泌・代謝疾患	小児科学 小山さとみ	
4		25	月	5	新生児疾患, 先天異常	小児科学 鈴木宏	
5		26	火	1	膠原病, 免疫疾患	小児科学 福島啓太郎	

回数	月	日	曜日	時限	講 義 テ ー マ	担 当 者	アクティブ ラーニング
6	7	26	火	2	感染症, 川崎病	埼玉医療センター小児科 松原知代	
7		26	火	3	循環器疾患	小児科学生 小坪井龍	
8		26	火	4	神経, 運動器疾患	小児科学生 小今高城	

V. 評価基準（成績評価の方法・基準）

一連の講義修了直後に試験を実施し、学生の講義内容の理解度を評価し、基準を満たしていない学生に対しては再試験を行うか、レポート提出を義務としている。

VI. 教科書・参考書・AV資料

講義スライド、配布資料を中心に学習する。

VII. 質問への対応方法

課題（試験やレポート等）について質問があれば随時受け付ける。但し、事前に秘書を通じアポイントを取ること。

VIII. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連

*◎：最も重点を置く DP ○：重点を置く DP

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）		
医学知識	人体の構造と機能，種々の疾患の原因や病態などに関する正しい知識に基づいて臨床推論を行い，他者に説明することができる。	○
	種々の疾患の診断や治療，予防について原理や特徴を含めて理解し，他者に説明することができる。	◎
臨床能力	卒後臨床研修において求められる診療技能を身に付け，正しく実践することができる。	
	医療安全や感染防止に配慮した診療を実践することができる。	
プロフェッショナリズム	医師としての良識と倫理観を身に付け，患者やその家族に対して誠意と思いやりのある医療を実践することができる。	
	医師としてのコミュニケーション能力と協調性を身に付け，患者やその家族，あるいは他の医療従事者と適切な人間関係を構築することができる。	
能動的学修能力	医師としての内発的モチベーションに基づいて自己研鑽や生涯学修に努めることができる。	○
	書籍や種々の資料，情報通信技術（ICT）などの利用法を理解し，自らの学修に活用することができる。	○
リサーチ・マインド	最新の医学情報や医療技術に関心を持ち，専門的議論に参加することができる。	
	自らも医学や医療の進歩に寄与しようとする意欲を持ち，実践することができる。	
社会的視野	保健医療行政の動向や医師に対する社会ニーズを理解し，自らの行動に反映させることができる。	
	医学や医療をグローバルな視点で捉える国際性を身に付け，自らの行動に反映させることができる。	
人間性	医師に求められる幅広い教養を身に付け，他者との関係においてそれを活かすことができる。	
	多様な価値観に対応できる豊かな人間性を身に付け，他者との関係においてそれを活かすことができる。	

IX. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験後のフィードバックについても随時受け付ける。ただし事前に秘書を通じアポイントをとること。

X. 求められる事前学習，事後学習およびそれに必要な時間

事前学習（30分）

- ・事前の配布資料を基に予習すること。
- ・種々の疾患を学び知識を深めることと同時に，疾患の社会的背景および保護者の心情を理解できるようになるという視点も持って講義に臨む。

事後学習（30分）

- ・講義のポイントをノートに整理する。
- ・疑問，理解が難しかった点は，教科書，インターネット等を利用して解決する。
- ・学習した内容を実際の臨床現場に生かす場面をイメージする。
- ・各授業で配布されたレジュメをもとに内容をまとめ質問に答えられるようにしておく。

XI. 医師国家試験出題基準（平成 30 年版）における区分

〔アレルギー疾患，呼吸器疾患〕

必修-7-D, 12-D・総論-VI-4-B・各論-IV-3-A

〔感染症，川崎病〕

必修-12-C・各論-III-10-A, XI-5-A, XII-1-A

〔成長，内分泌・代謝疾患〕

必修-5-D, 7-J, 7-L・総論-IV-6-A, 7-A, VI-10-AB・各論-X-1-B, 7-B, 10-AC

〔新生児疾患，先天異常〕

総論-V-2-A～C・各論-I-1-D, 3-C～E, 4-A

〔循環器疾患〕

必修-5-D, 7-D, 9-O, 12-E・総論-III-4-A, IV-5-B, VI-4-G～Q, VIII-2-B

各論-V-3-A～C, V-5-E

〔小児救急疾患，悪性腫瘍〕

必修-7-ADE, 11-C, 12-FL・総論-VI-1-AEFH, VI-5-E, IX-10-EG

各論-II-5-K, III-9-B, IV-2-A, IX-11-C, VI-1-F, VI-12-C, IX-3-ADE, XIII-5-G,

III-6-E, VI-12-E, VIII-3-E, 6-A, X-4-B

〔免疫，膠原病〕

各論-XI-2-A, 3-A～G, 5-A

〔神経，運動器疾患〕

各論-I-3-BFG, II-5-A～O, IX-3-ADE, 5-D, 6-AB